

# 法然上人と源智上人

伊藤 真宏

## 〔抄録〕

源智は、法然晩年の弟子として有名であるが、その詳細が鮮明なわけではない。法然を中心とした伝記の中の、重要な弟子としてその業績が語られても、その素顔が明らかとはいえない。新資料の発見とともに徐々にその人間像が形成されつつあるが、解明さが十分ともいえない。

改めて資料を再確認する中で、源智の出自、法然を師とした縁

について、有力な弟子との関係性、などを論じて吟味し、従来の源智像がそれでよいのか、新たに提示される源智像がそうであるのか、見極めるのが本稿の主眼である。

**キーワード** 法然、源智、信空、證空、念仏信仰

## 1. はじめに

勢観房源智（一一八三―一二三八）は、師、法然（一一三三―一二二二）から遺訓『一枚起請文』を授けられたことで知られる。また昭和四十九年（一九七四）、滋賀県の真言宗玉桂寺の阿弥陀仏像が、源智造立であり、胎内から源智の願文と、四万六千人の結縁者の名前が書かれた「結縁交名帳」が発見された。このことは、『一枚起請文』をめぐって注目されることはあっても、不明な点の多い源智のイメー

ジを一変させたわけであり、実際、願文や「結縁交名帳」での研究成果も多い。

法然上人八百年大遠忌を平成二十三年（二〇一一）に迎え様々な催しがなされる中、玉桂寺から源智造立阿弥陀仏像が浄土宗に譲られ、知恩院に帰ってこられた。また本年度、大正大学で開催された浄土宗総合学術大会では、特に「源智部会」が設けられ注目された。

本稿では、従来の研究成果を踏まえ、特に源智と、法然の弟子との関係性に留意しつつ、彼の人間像について指摘してみたい。

## 2. 源智の出自について

源智の伝記については、『法然上人行状絵図』（以下『四十八巻伝』と略称）四十五巻に出てくる記述が、比較的詳細で古い。<sup>①</sup>『四十八巻伝』をめぐって取り上げられる法然上人の伝記で、源智の記述が垣間見られるが、「源智の伝記」という意味では、『四十八巻伝』がまとまっている。前述の造立願文は、大恩深き法然上人への追慕の情があらわれていて、彼の性格と師への態度が彷彿とする。

『四十八巻伝』四十五によれば

勢観房源智は備中守師盛朝臣の子、小松の内府（重盛公）の孫なり。平家逆乱の後、世のはかりありて、母儀これをかくしもてりけるを、建久六年、生年十三歳のとき、上人に進ず。上人これを慈鎮和尚に進せられけり。かの門室に参して出家をとけおはりぬ。いく程なくて、上人の禅室に帰参、常髓給仕首尾十八箇年、上人憐愍覆護、他にことにして、浄土の法門を教示し、円頓戒この人をもちて附属とし給ふ。これによりて道具本尊房舎聖教、のこる所なくこれを相承せられき。

とあって源智は、平師盛の子で、平重盛の孫とある。重盛は、太政大臣平清盛の子で、東大寺を焼いた平重衡と兄弟であり、源智は清盛の曾孫、重衡は父の叔父という関係になる。このことは事実なのであろうか。

源智の没年は一二三八年であるから、『四十八巻伝』の成立が三三一年として、源智没後七十三年である。それは壇ノ浦で平氏が滅亡してから一三六年という歳月であるが、法然没後百年という年数と、源智没後七十数年という年数は、おのずからその性格が異なる。すなわち、百年というのは、その生身の法然を知る人物が全く存在しない年数であり、七十数年というのは、まだ辛うじて生身の源智を知る人物の存在が考えられるのである。対象人物の尊敬の度合いが高いほど、神格化の傾向は顕著なのであり、それは存命であっても神格化されるものである。まして、対象人物が没して時間が経過すれば、神格化は増大し、生身のその人を誰も知らなければさらにその方向性に拍車がかかるといえよう。しかし、その傾向があつたとしても、生身のその人を知る人物の存在は、その傾向にある程度ブレイキをかけるものであろうから、わずか三十数年という数字の差は、事実性の認識において、大きな意味をなすこととなる。ましてこの文献は法然の伝記が主眼であり、源智を神格化する必要はないであらう。

もし、源智の出自がその家系でないとして、神格化されて平氏の末裔と記述されたとすれば、平氏滅亡から一三六年ならばまだ、しっかりと事実を伝承する人は存在するであらう年月であるし、事実を知人はそのことに誤謬の指摘をなすであらう。とすれば、七十数年という時間を考慮しても、『四十八巻伝』における源智の記述の事実性は極めて高いと考えてよい。

ただ問題がないわけではない。師盛は一一八四年に一の谷で討ち死にしている。そのときの年齢が十四歳という<sup>②</sup>。源智は生年一一八三年

であるから師盛十三歳のときの子となる。数え年十三歳ということは、現在の満年齢では十二歳か十一歳。はたしてそんなことはあるのだろうか。もちろん、武将の子、いつ何時、命を落とすこともあるという命運では、可能な限り早く妻をめとり、子をもうけるというような状況が用意されることも、あるいは本人もその意識でいることもあるだろう。『平家物語』の事実性の問題もあろうから、師盛の寂年について詳細な調査が必要であるが、可能性のまったくない年齢ではない、とすれば、『四十八巻伝』の記述を信頼しておきたい。<sup>(3)</sup>

### 3. なぜ法然を師としたのか

さて、母親が源智を法然のもとに預けたわけであるが、「上人これを慈鎮和尚に進せられけり。かの門室に参して出家をとけおはりぬ。」とあって、法然は源智を、まず慈円（一一五五—一二二五）のもとへやり、そこで出家受戒、という手順を踏ませている。慈円は法然の最大の理解者、九条兼実の弟で、建久三年（一一九二）から第六十二世天台座主となっている。以後、六十五、六十九、七十一世と四度にわたり座主になるが、次の六十三世、承仁法親王が建久七年（一一九六）に座主になるまでの四年間、その座にあった。つまり建久六年（一一九五）の源智入門は、慈円が天台座主であったときのこととなる。慈円にとつては、兄の兼実が帰依した法然であり、法然と懇意であることは疑いようがない。源智を、法然が慈円に差し出したことについては、比叡山において正式な出家受戒を遂げさせようとしたこと

であろう。

「平家逆乱の後、世のはかりありて、母儀これをかくしもてりける」とあって、壇ノ浦の時わずか三歳の、師盛の子である源智が、平氏掃討の目を十年潜り抜けて十三歳で法然のもとにやってきたという図式なのだが、なぜ行き着く先が法然だったのだろう。師盛の子、重盛の孫であるから、比叡山の関係者等々、家系を通じての出家先は南都北嶺に数多あつたであらう。もちろん、そういう素性であるからこそ、正式なルートでの出家ということが、憚られた、ということはあるかも知れない。

法然は、源智の入門の一一九五年、六十三歳となっている。一一八六年、大原談義という大きな行事を乗り越えて法然は、それから広く世に知られるようになったと思われる。<sup>(4)</sup> 大原談義とは、天台宗の顕真（一一三一—一一九二）の呼びかけで催された法然の念仏に対する、いわば公開シンポジウムであり、ここで天台や興福寺を中心とする南都北嶺の碩学から、法然の説く念仏が認められる格好となった。顕真は建久元年（一一九〇）に第六十一世天台座主となる人物で、慈円の前の座主である。その顕真が主催した大原談義で、当代きつての碩学たちから認められるのであるから、法然の名声が高まったであろうことは想像に難くない。そういう流れの中で、権力者九条兼実との出会いにつながっていくのである。

法然の高まった名声が、源智の入門先の選択肢になったということも考えられるわけであるが、世に憚られる源智の出家先が、名声の高まった法然、というようなことになるのだろうか。別の要因が考えら

れないであろうか。

法然の出自は、『四十八巻伝』では「抑上人は美作國久米の南條稻岡庄の人なり父は久米の押領使漆の時國母は秦氏なり」（『四十八巻伝』一）とあって、美作國久米郡久米南條稻岡庄の生まれ、押領使、漆時國の子である。<sup>⑤</sup>武士の子としての素養を十分に身に付け養育されるが、九歳の時、父時國は、同地の預所との確執から夜襲され非業の死を遂げる。

時國ふかき疵かうふりて死門にのそむとき九歳の小兒にむかひていはく汝さらに會稽の耻をおもひ敵人をうらむる事なかれこれ偏に先世の宿業也もし遺恨をむすはゝそのあた世々につきかたかるへししかしはやく俗をのかれいゑを出て我菩提をとふらひみつからか解脱を求にはといひて端坐して西にむかひ合掌して佛を念し眠かことくして息絶にけり（『四十八巻伝』一）

まさに死せんとする枕辺での息子に向けた遺言が、「敵人をうらむる事なかれ」であり、「はやく俗をのかれいゑを出て我菩提をとふらひみつからか解脱を求には」であった。武士であり、もし父が敵に殺されたなら、その父の仇をとることが、常識的、道徳的に認められた時代にあつて、父時國は九歳の法然に恨みを捨てて自分の弔いと法然の解脱を求めて、出家を勧めた。そのことが「救済者法然」を生み出したわけである。

歴史に「もし」は禁物であろうが、もし、そのとき法然が父の非業

の死に遭わず、順調に成長していたら、家督を継ぎ、押領使として久米地方の治安を維持したであろう。このときの美作守が、平忠盛（一〇九六―一一五三）である。<sup>⑥</sup>つまり、時國はもちろん、法然が武士としてそのまま元服し漆間家を継承していれば忠盛の家人として仕えている可能性がある。忠盛は清盛の父であり、忠盛―清盛―重盛―師盛―源智と次第する、源智から見れば直系の祖先なのであり、法然の出自と源智の運命を深い縁としてとらえ、預ける先としての相応しさを汲み取ったとしても無理はない。

関山和夫は「源智上人の出家を、源氏の殘党狩りから逃れるためと考えるのは低次元の考察であり、母の意志は、亡夫の父重盛の篤信の心を継承し、亡夫と平家一門の菩提をとむらうところにあつたと考えべきだろう」<sup>⑦</sup>と述べていて示唆的である。

源智の、法然を師としての出家は、従来の「平氏掃討」と「時代の寵児法然」というようなことでなく、いわば時代の必然と、深い縁のなせる、大きなうねりの中で、めぐってきたというべきものであろう。

#### 4. 他の弟子との関係性

源智が法然のもとにやってきたのは、建久六年（一一九五）、そこで法然は、天台座主慈円のもとへ差し向けた。正式な出家受戒の後、源智はすぐに法然のもとに帰ってきたようである。『四十八巻伝』では「いく程なくて、上人の禪室に帰参、常隨給仕首尾十八箇年」と記述され、法然示寂の一二二二年から十八年遡ればちょうど一一九五年

となるので、ともかく正式な僧侶としての出家授戒を遂げさせることだけが目的であり、その目的が達成されて源智はすぐさま法然のもとに帰って来た可能性が高い。

先にも述べたが、法然はその時六十三歳。五十四歳で大原談義を経て、その名声は高まり、五十七歳で九条兼実の知遇を得、五十九歳で東大寺での三部経講説等々、南都北嶺から貴族社会にまで認められる存在となっている。

平重衡の兵火によって治承四年（一一八二）に焼失した東大寺を、俊乗房重源（一一二一—一二〇六）が勧進聖となって再建した一連の事業では、一般的に、文治元年（一一八五）に後白河法皇が列席して大仏開眼供養が行われ、また建久六年（一一九五）に源頼朝が列席しての大仏再建供養の法会が知られている。

『四十八巻伝』では

俊乗房、無縁の慈悲をたれて、かの後世のくるしみかを救はんために、興福寺東大寺より始て、道俗貴賤をすゝめて、七日の大念佛を修しけるに、その比までは、人いまだ念佛のいみじき事をしらすして、勧めにかなふものすくなかりければ、俊乗房この事を歎て、人の信を勧めんかために、建久二年の比、上人を請したてまつり、大佛殿のいまた半作なりける軒の下にて、入唐の時渡し奉れる、観經の曼陀羅、ならひに浄土五祖の影を供養し、また浄土の三部経を講せさせ奉りける（『四十八巻伝』三十）

とあって、建久二年（一一九一）に、まだ工事中の大仏殿の軒下で法然が浄土三部経を講義したことが記される。日本全国から注目される東大寺大仏の再建と大仏殿の再建の工事中に、法然は、勧進聖重源の要請に応じ、東大寺という南都仏教の真つただ中で、法然浄土教思想を開陳したのであるから、大原談義以降の、法然への注目度の高まりは計り知れないものがある。

そういう状況の法然六十三歳時に、源智は十三歳で法然に入門した。その当時、法然のもとにいたのは、法然と同格とつていい法蓮房信空（一一四六—一二二八）<sup>8</sup>、真観房感西（一一五三—一二〇〇）、善慧房證空（一一七七—一二四七）等であつて、それぞれ法然六十三歳、信空五十歳、感西四十三歳、證空十九歳である。

感西は、『四十八巻伝』によると、

真観房感西（進士入道これなり）は、十九歳にてはじめて上人の門室にいる。師としつかへて、法要を諮詢する事、おほくの年なり。選択を草せられけるにも、この人を執筆とせられけり。また外記の大夫逆修をいとなみ、上人を請じたまつて、唱導とす。上人、一日をゆづりて、真観房につとめさせられき。器用無下にはあらざりけり。しかるを上人にさきだちて、正治二年閏二月六日、生年四十八にて往生をとぐ、上人念佛をすゝめ給けるが、我をすてゝおはすることよとて、なみだをぞおとし給ける。（『四十八巻伝』四十八）



とあって、感西が十九歳の時に法然のもとに入った。正治二年（一二〇〇）に四十八歳で示寂しているので、十九歳時は一七一年。法然がまだ比叡山にいる時のことである。「師としつかへて」と改めて述べているように、法然が三十九歳、比叡山黒谷別所の叡空のもとに信空とともにいる時に、法然を師として入門、以降亡くなるまで法然につき従ったことが分かる。『選択本願念仏集』撰述の場にも、執筆役として連なり、法然が招かれた法要でも一回は代わって勤めさせたり、と非常に重要な弟子なのである。

ただ感西と法然をめぐっては、西山派系学僧行観『選択本願念仏集秘鈔』という文献で、法然の行業を記す中に、

諸宗修學者相摸阿闍梨（眞言師也）。光樹房人同眞言師也。此人者本堂衆後入眞言。是入壇師也。華嚴師慶賀法橋（仁和寺岡法橋云又云醍醐法橋）。此人後受戒爲師弟。其布施圓宗文類（二十二卷）。法相師教明房（藏俊）。此人贈僧正也。聲聞戒師中河少將。上人彼上人補處之弟子如如房彼學聲聞戒。然而彼上人籠居後弟子也。故不分明。仍彼上人弟子大夫上人播摩國清瀧山寺止住到清瀧學也。光樹房爲眞觀房師也。然眞觀房故法然上人相弟子也。光樹房逝去後屬上人取弟子之禮（云云）。（『浄土宗全書』八一—三三六下）

とあって、法然の眞言の師が光樹房であり、この光樹房が感西にוותても師にあたる、つまり兄弟弟子なのであるといい、光樹房逝去の

後、法然の弟子となった、とある。感西の伝記については文献も限られ不明な点も多い。『選択本願念仏集秘鈔』についての文献学的知識に乏しいので、今後の課題としておくが、法然の伝記に関してや『選択本願念仏集』をめぐる伝承についての記述も、一般的に知られる事柄と齟齬があり、ここは『四十八巻伝』によっておきたい。

いづれにしても感西は、法然にとって非常に重要な弟子であり、實際のところ、法然の実質最初の入門者であるから、文字通り、一番弟子という存在である。

證空は『四十八巻伝』によれば、

西山の善惠房証空は、入道加賀權守親季朝臣（法名證玄）の子なり。久我の内府（通親公）の猶子として、生年十四歳の時、元服せしめむとせられるに、童子さらにうへなはす。父母あやしみて、一条堀川の橋占をとひけるに、一人の僧、眞觀清淨觀、広大智惠觀、悲觀及慈觀、常願常瞻仰となへて、東より西へゆくありけり。宿善の内にもよほすなりけりとて、出家をゆるさんとするとき、師範の沙汰のありけるをきゝて、童子のいはく、法然上人の弟子とならん、と。これによりて、建久元年、上人の室にいる。やがて出家せさせられて、解脱房と号す。たゞし笠置の解脱上人と同名なるによりて、これをあらためて、善惠房とつけられき。その性俊逸にして、一遍見聞するに、通達せずといふ事なし。上人にしたがひたてまつりて、浄土の法門を稟承すること、首尾廿三年（自十四歳至卅六歳）なり。稽古に心をいれて、善導の觀

經の疏を、あけくれ見られける程に、三部まで見やぶられけるとぞ申伝侍る。『四十八卷伝』四十七)

とあつて證空が十四歳の時に法然の室に入門し、法然が寂する建暦二年(一一二二)までの二十三年間、法然のそばにいたことが分かる。源智は法然晩年の弟子で、年齢的にも法然とは五十歳差、まるで祖父と孫のようにも感じられ、常在給仕としての姿や、遺言としての「一枚起請文」を賜ったエピソードの印象もあつてか、年少者のイメージを持ちやすいが、證空も実は若い弟子である。源智と六歳しか離れておらず、法然のもとに源智が入門した時、證空は十九歳である。また證空は、信空や感西と共に比叡山の叡空からのつながりであるのに対して、比叡山を下りた法然を師として出家した。しかも源智と異なり、自分の弟子として出家させている。源智については天台座主に差し出して、先に出家授戒させ、いわゆる正式な出家者としての手続きをとったとみられる。この違いはいったい何を意味しているだろうか。法然は、比叡山で良忍から天台宗の正当な円頓菩薩戒を受けた継承者としての叡空から戒を授かったわけであり、その法然が證空に戒を授けて出家させることで弟子となすことには問題がない。源智の場合も法然のもとにやってきたのに、天台座主慈円のもとに送ったのである。この違いは、二人の氏素性やそれぞれの出家当時の政治状況などが微妙に関わっている可能性もある。すなわち證空の父は加賀権守親季、養子先の父が「久我の内府(通親公)」とあつて共に源氏、源智は前述の如く平氏である。この違いが法然の弟子に対する思いと何か関わ

っているかもしれない。今は、確たる論証の方法を持ち合わせていないので、これ以上の詮索は無用だが、年齢も近い證空と源智の出家にまつわる相違点については今後の課題としておく。

さて、こういう関係性、つまり、信空と感西が法然につき従う中、法然が一躍著名となり、それまで庶民層を中心にその信者が取り巻いていた状況から、大原談義を経て、九条兼実との出会いの次の年に證空が入門。貴族から武士層の帰依などを受け出した中で、源智が出家して法然に入門してきた。前述したが、法然六十三歳、信空五十歳、感西四十三歳、證空十九歳というところに、源智が十三歳で入門する。證空は入門から五年。五年と言え、すでに十分な教育がほどこされ、一定の成果というか、ある程度の水準に達していたと見るべきであろう。事実證空は、この三年後の建久九年(一一九八)、法然『選択本願念仏集』執筆の場で、勘文役という重要な役割を与えられている<sup>1)</sup>。二十二歳となり仏教的知識と深い法然浄土教信仰を具備して身心ともに充実した證空は、法然の要求によく応えたであろう。そんな優秀な先輩に接する源智もまた、影響を受けたに違いない。『一枚起請文』や法然没後の結縁交名、阿弥陀仏造立につながっていくことは、ある意味自然なことであつた。

法然自身が教学的にはもちろんのこと、信仰的にも純熟しているような状態の中で、法然と互いに兄弟の如く信頼する信空、文字通り法然の一番弟子として至心につき従う感西と、若くて優秀かつ身心ともに充実してきた證空に囲まれた源智が身につけたものは、当然、充分な仏教知識と深い念仏信仰、そして、法然の発言の通りに生きようと

する姿勢であつただろう。常在給仕と言われる源智は、法然の身の回りの世話をする中で、法然の個人的な発言はもとより、法然のもとにやってくる帰依者に対して、法然が懇切丁寧に、真心から説き明かされる念仏信仰を、源智はずっとそばで見聞きしてきたのであり、それらをすべて吸収したことは単なる想像とはいえない。

## 5. 源智の人間像

源智の人間像について、従来、消極的で物静かで穏和、というイメージを持たれていた。それは恐らく『四十八巻伝』の記述による。

勢観房一期の行状は、たゞ隠遁をこのみ自行を本とす、をのつから法談などはしめられても、所化五六人よりおほくなれば、魔縁きをひなん、ことごとしとて、とゞめられなとそしける。生年五十六、暦仁元年十二月十二日、頭北面西にして、念佛二百餘遍、最後には陀佛の二字はかりきこえて、息絶給にけり。功德院（賀茂神宮堂也）の廓にてをはり給ふに、佛前より異香薫して臨終所にいたる、そのひとすちのにほひ、数日きえさりけり。（『四十八巻伝』四十五）

とあつて、これを読めば、ひっそりと一人で念仏行に明け暮れていて、たまに人がいて談義することがあつても集まりだして五、六人を超えたら止める、という徹底ぶりが見て取れる。しかし、昭和四十九

年（一九七四）、滋賀県の真言宗玉桂寺の阿弥陀仏像が、源智造立であり、胎内から源智の願文と、四万六千人の結縁者の名前が書かれた「結縁交名帳」が発見されたことで、そのイメージが一変する。すなわち、源智は法然示寂後、その恩徳に報いる目的で阿弥陀仏像造立を決意、寄進者の名前と願文を記してその胎内に納めた。その業をわずか一年足らずの建暦二年（一一二二）十二月二十四日に成し遂げ、法然一周忌に間に合わせた。その結縁の名前は四万六千人。この大事業を一年足らずで成し遂げたというイメージは、まさに積極的な布教者ということになったのである。

しかし、そうであろうか。そもそも、法然の言動を日常からずっと見聞きしていた源智にとつて、「たゞ隠遁をこのみ自行を本とす」とは、法然が念仏を日々に六万遍七万遍称えていたということを考えれば、いわば当たり前のことであり、「をのつから法談などはしめられても」とあるのであるから、自然発生的に法談が始まるのであり、つまり、源智の居所にも人が集まっていたわけである。

「所化五六人よりおほくなれば、魔縁きをひなん、ことごとしとて、とゞめられなとそしける」というのも、法然の遺言として言い残されたことにある。『四十八巻伝』によれば、

上人臨終のとき遺言のむねあり。孝養のために精舎建立のいとなみを、なすことなかれ。心さしあらは、をのをの群集せず、念佛して恩を報すへし。もし群集あれば鬭諍の因縁なりとの給へり。

（『四十八巻伝』三十九）



とあって、法然は、集まれば論争の種となることを危惧している。

このことを源智は忠実に実行していたに過ぎないのではないだろうか。

そういう源智が、法然の亡き後、その供養として何かをなすことを考えた時、これまで十八年の慈愛に満ちた養育と、与えられた仏教、念仏信仰を、恩として報いるために、阿弥陀仏像を造立しようとしたのは、あまりにも当たり前である。そのことは願文<sup>12</sup>に詳細に述べられていて感動的であるが、それを一年以内に成し遂げた、と言うことが源智の積極性を示すわけではない。それより、法然を慕えば慕うほど、そのことが完遂されなければならない思いは募るのであり、生前の法然の教旨に忠実であろうとすればするほど、多数の結縁者と一刻も早い阿弥陀仏像造立となるのが自然である。

源智はもともと消極的で物静かで穏和、というわけではなく、また、積極的な布教者、というわけでもない。源智はただ、法然に真率であり実直であっただけ、ということが明らかとなるのである。そしてそれはまさに、信空と感西という老練な指導者と、證空という若き俊秀に囲まれて、法然の徳を一身に受けたという、関係性において生成され結晶となったといえよう。

## 6. まとめ

資料の少ない中、源智の人間像について、先学の論考に導かれながら見直してみた。源智の父については、『四十八巻伝』の文献的検討を踏まえ、平師盛である可能性の高いことを確認。師盛の曾祖父、忠

盛が法然幼少時の美作守であった縁を頼りの出家の可能性を指摘、それらの供養と平氏一門の供養を背負い、そこに法然の名声の高まりが運命のうねりとなって、源智は法然と師弟の関係を結ぶことになった、と愚考した。法然の出家のきっかけとなった父の菩提を弔うことを思うと、そこにも源智は深い因縁を感じたことであろう。

また法然と、信空、感西という比叡山からの縁で結ばれている三人と、比叡山下山後に法然を師として出家した若き證空という優秀なる先輩に囲まれて源智は、そもその出家の目的とあいまって、非常に熱心にして篤信な弟子となり、その熱心さが故の、法然寂後の阿弥陀仏像造立と四万六千人の結縁交名という壮大な信仰行動につながるのである。その熱心さは、単なる熱心さではなく、どこまでも法然を追慕、尊敬し、その法然の日常の言動が源智の平生の鑑ともなっていく。その、父とも祖父とも慕う師の示寂、という現実から出てくる心からの報恩感謝の念に突き動かされる行動であって、そこには、源智そのものの性格から由来する積極性とか消極性というようなものはなかったと考えてよいだろう。

源智は、ただ法然の発言、行動を手本とし、誰ともなしに集まってくる信者に、時には講じ、時には談じ、その輪が広がりを見せれば辞す、という、あくまでも法然の教えに忠実に行動した結果であり、ひっそりと消極的に一人念仏したわけでもない。また、亡き師匠への養育の強烈な感謝の念が、一年以内の阿弥陀仏像造立と結縁交名となっただけであり、源智の積極的布教者像を示すでもない。ただ、源智はひたすらに法然上人を追いかけて念仏者としてあったのである。

もとより、源智のことが明確にできた、とは思わない。本稿においても、さらなる『平家物語』の事実性の追究、源智の関係文献の発掘、弟子周辺の関係性のきめ細かな調査、等々を課題として置き去りにしている。今後も考察を重ねていくつもりである。諸賢のご指導を請いたい。

〔注〕

(1)『法然上人行狀絵図』(全四十八巻、浄土宗総本山知恩院蔵)は法然百回忌を記念して作成されたといわれる浩瀚な絵巻物で、成立は法然の没年が建暦二年(一一二二)であるから一一三一年がその時に当たる。一一三一年に全巻が完成したのか、一一三一年を中心とその前から作成し始められその後に完成するのか、一一三一年に発願されて後年に成立するのか、はたまた初巻から順次作成されたのか、ランダムに各巻が完成するのか、その詳細については不明である。しかし、ともかくも百回忌の記念に作成されたことについては異論がない。法然の伝記、語録から弟子の行状にいたるまで網羅し、法然伝の集大成というにふさわしい。偉人高僧の伝記によくある「神格化」がみられ、文献学的見地から、法然の行状や言行という部分では、事実性に問題があることは否めないが、少なくとも法然没後百年の段階での浄土宗教団の認識、ということはいつてよい。

(2) 師盛の訃ち死にした年齢について『平家物語』には「生年十四歳とそ聞へし」とあるが、『参考源平盛衰記』には十八歳、『四部合戦状本平家物語』では十六歳と、定まらない。三田全信は、二十四歳の誤りではないかと指摘している（『浄土宗史の諸研究』参照）。ここは一般的な『平家物語』により、その可能性に言及した。

(3) 綿密に用例を集めてはいないが、例えば仁王は一五一年に生まれ北陸宮が一六五年に誕生していて十五歳の時の子、龜山天皇は一二四九年に生まれ、暁子内親王が一二六二年に誕生していて十四歳の時

の子、松平信親は一四七三年に生まれ、信忠が一四八六年に誕生して  
 して十四歳の時の子、武田信豊が一五一四年に生まれ、義統が一  
 五二六年に誕生して十三歳の時の子、などと、可能性を示す例は  
 ある。

(4) 大原談義の学問的検証が様々論じられるが、ここでは一応、『四十八巻伝』の通説による。

(5) 一般的には、父、漆間時国という。法然の伝記については文献学的な検証も研究成果も多い。法然の出自が、美作国久米郡久米南條稻岡荘の生まれ、押領使、漆間時国の子、母は秦氏、ということについてはどの伝記もほぼ共通しており、事実として認められる。今は『四十八巻伝』による。

(6)『中右記』『台記』などの資料整理によってまとめられた様々な辞典の記述を総合すれば、忠盛は保延二年(一一三六)ごろから、少なくとも天養元年(一一四四)ごろまでは美作守の任にあったと見られる。

(7) 関山和夫稿 『平家物語』に見る浄土教と源智上人の立場」(『源智弁長 良忠 三上人研究』所収 昭和六十二年 同朋舎刊)

(8) 法然の筆頭弟子として語られることが多い信空であるが、共に比叡山で慈眼房叡空(？―一一七九)の弟子であり、叡空を師とした兄弟弟子関係である。法然が比叡山を下山後も叡空についていたが、叡空寂後の一一七九年に法然のもとにやってきた。法然四十七歳、信空三十四歳のことである。拙稿「法然の周辺―弟子の関係性と信空」(『西山学苑紀要』5 (2010.3)) 参照

(9) 證空の伝記については、『四十八巻伝』が一番古く、同時代の、凝然章』にもその伝が見える。『源流章』の成立は一一三一年であり、これら文献が證空伝としては現在までのところ最古のものである。證空は、一二四七年に示寂しているから、證空にとつて一一三一年といふのは、寂後六十四年。それより古い資料が見当たらない現段階において、この両者は證空研究の第一級の資料といえよう。西山派として證空を描いたものは、『西山上人縁起』。成立は一一三八八年で、證空寂

後一四一年という時を経る。この次はもう江戸時代の資料になるようである。拙稿「法然上人と證空上人」「法然上人八〇〇年大遠忌記念法然仏教とその可能性」法蔵館刊（2012.3）参照。

- (10) 九条兼実の日記『玉葉』、文治五年（一一八九）八月一日の一節に「今日請法然房之聖人 談法文語及往生業」とある。以降、法然と兼実は頻繁に交流し、本人はもとより、親類等にたびたび授戒、談義を重ねる。法然が教義書『選択本願念仏集』を書くことになったのは、兼実の要請がきっかけとなった。建仁二年（一二〇二）法然を師として出家。

『玉葉』の原本が宮内庁書陵部にある。平成二十三年三月から五月に京都国立博物館で開催された「法然上人八百回忌 特別展覧会」の図録『法然 生涯と美術』七〇頁にその影印が掲載されている。参照されたい。

- (11) 證空が『選択集』に関わってなした役割については、證空著『選択密要決』、行觀著『選択本願念仏集秘鈔』、凝然著『浄土法門源流章』、『四十八卷伝』、聖罔著『決疑鈔直牒』等で明かされるが、ともかくも『選択集』執筆の場に連なつて經典論疏の引用や確認作業にあつたことは事実であろう。前掲註（9）、拙稿参照。

- (12) 源智造立の阿弥陀仏像と胎内文書（願文、結縁交名帳）はさまざまな研究成果が報告されている。「法然上人八百回忌 特別展覧会」の図録『法然 生涯と美術』一三〇～一三四頁にかけてそれらが掲載されている。参照されたい。

#### 〔参考文献〕

『勢観房源智』梶村昇

『源智 弁長 良忠 三上人研究』三上人御忌記念出版会編 ほか

#### 〔付記1〕

源智と法然や信空等の年齢や事歴など、関係性を一覧すると、理解の

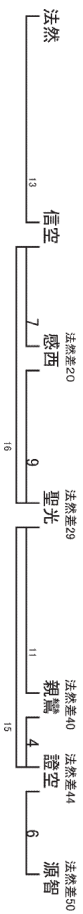
一助となる。その図表を添付するので参照されたい。

#### 〔付記2〕

拙論をなすにあたり、とくに梶村昇著『勢観房源智』に触発された。記して感謝申し上げたい。

（いとう まさひろ 仏教学科）

二〇一一年十一月十四日受理



111

